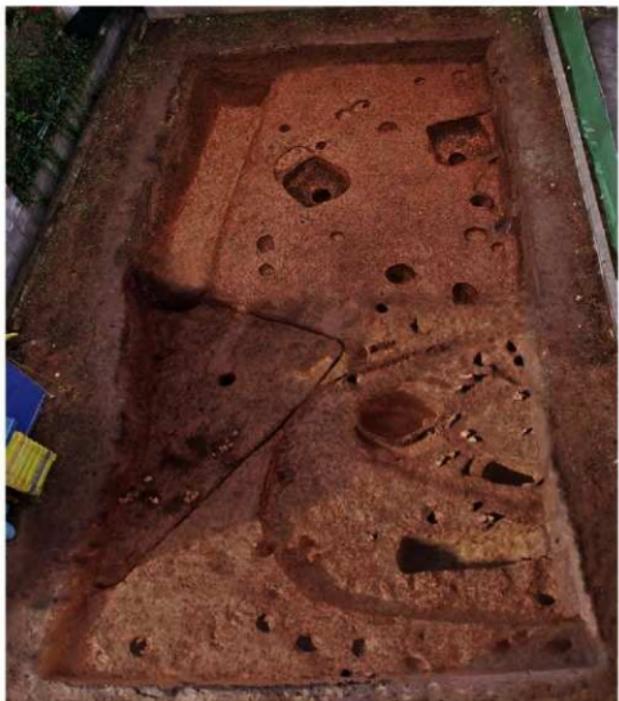


い　じり　　B　　い　　せき  
井 尻 B 遺 跡 27

—井尻B遺跡第42次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1307集



調査区全景（東から）

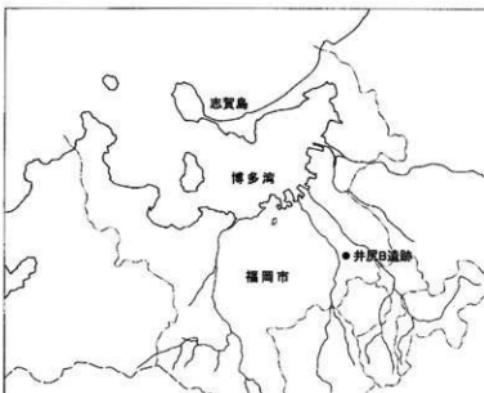
2017

福岡市教育委員会

い　じり　B　い　せき  
井 尻 B 遺 跡 27

—井尻B遺跡第42次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1307集



調査番号 1434

遺跡記号 IGB-42

2017

福岡市教育委員会

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が専用住宅の建設に先立って、平成 26（2014）年度に、福岡市南区井尻一丁目 707 番 6 で緊急発掘調査した井尻 B 地跡第 42 次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3. 本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、小林義康が作成した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の写真是、小林が撮影した。なお、金被写真は、2 分割して撮影した東西両区の写真を CG で合成した。
5. 本書の執筆・編集は、小林が行った。
6. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1434	遺跡略号：ICB-42	分布地図番号：25-0090
調査地點：福岡市南区井尻一丁目 707-6		
1. 草古積：68ml	調査対象面積：68ml	調査実施面積：66ml
調査期間：2014年12月9日～12月19日		

# 序

はるか二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区井尻一丁目 707 番 6 で専用住宅の建設に先立って実施した井尻B遺跡第42次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、竪穴住居と掘立柱建物からなる弥生時代の集落跡が発見されました。井尻丘陵の北西端に立地する弥生時代の集落域の発見は、井尻の丘陵上に拡がる弥生時代の集落域の消長を知る上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 本文目次

序	
I.はじめに	1
1.発掘調査にいたるまで	1
2.発掘調査の組織	1
3.立地と歴史的環境	3
II.調査の記録	7
1.調査の概要	7
2.堅穴住居	7
3.掘立柱建物	9
4.土坑	10
5.その他の遺構と包含層の遺物	11
III.おわりに	11

## 挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig. 2	井尻B遺跡位置図(1/6,000)	4
Fig. 3	井尻B遺跡第42次調査区位置図(1/1,000)	5
Fig. 4	井尻B遺跡第42次調査区周辺現況図(1/400)	6
Fig. 5	第42次調査区遺構配置図(1/100)	7
Fig. 6	11号住居実測図(1/60)	8
Fig. 7	11号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)	8
Fig. 8	12号住居実測図(1/60)	9
Fig. 9	12号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)	9
Fig. 10	1号建物実測図(1/80)	10
Fig. 11	1号建物出土遺物実測図(1/4)	10
Fig. 12	17・18号土坑実測図(1/30)	11
Fig. 13	ピット・包含層出土遺物実測図(1/2)	11

## 図版目次

表紙	調査区全景(東から)	
PL. 1	1)調査区全景(北から)	2)11・12号住居(東から)
PL. 2	1)11号住居(北から)	2)12号住居(北から)
PL. 3	1)12号住居遺物出土状況(南東から)	2)12号住居台付鉢・小型丸底壺出土状況(東から)
PL. 4	1)12号住居壺出土状況(東から)	2)15・17・18号土坑(北から)
PL. 5	1)1号建物(北から)	2)1号建物P1土層断面(西から)
	3)1号建物P2土層断面(西から)	
PL. 6	出土遺物(縮尺不同)	

## 表目次

Tab. 1	井尻B遺跡調査一覧表	12
--------	------------	----

## I. はじめに

### 1. 発掘調査にいたるまで

井尻B遺跡は、福岡平野を北流する那珂川に沿って春日市の須玖岡本から井尻・五十川・那珂・比恵へとつづく低丘陵上に立地している。この那珂川以南の地は、昭和30（1955）年代まで農業を基盤とする村々が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、昭和40（1965）年代以降の高度経済成長期に郊外の市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

井尻の地は、春日市の岡本から那珂・比恵へと長く続く低丘陵の中ほどに位置する。この地は、北へ行けば竹下、南は春日、東は板付から月隈、西へは口佐から老司への分岐点にあたり、西鉄大牟田線の井尻駅周辺は、交通の利便性に長じた地として早くから本村を中心に住宅地が拡がっていた。そのため村中は、道幅の狭い道路が網の目のように延びている。しかし、井尻御供所線の整備に伴って周辺の様相は一変し、地中層の共同住宅建設が増加している。

第42次調査区の周辺では、井尻御供所線の道路新設に伴って発掘調査が実施され、小型彷製鏡や銅鏡、銅戈、銅矛などの鋳型やそれらの鋳型で製作された青銅製品のはかに埴塙などが出土しており、青銅器やガラス製品を製作する集落域が拡がっていることが確認されている。

平成26（2014）年11月11日に南区井尻一丁目707番6地内において専用住宅の建設が計画され、遺跡の存否確認の照会が埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）に提出された。照会地は、井尻B遺跡として周知された埋蔵文化財の包蔵地内にあり、その周辺には第7・10・15次調査区があることから申請地内には弥生時代の遺構が拡がっている可能性が予測された。そこで同年11月20日に確認調査を実施してその存否を確認したところ、竪穴住居や溝が重複しながら全城に拡がっていることが確認された。これを受けて現状保存のための協議を行ったが、建設計画が進んでいると同時に基礎杭が深度5.3mにも及ぶことから設計変更は不可能であった。そのために建築物によって破壊される範囲を速やかに発掘調査して記録保存を図ることになった。

発掘調査は、平成26（2014）年12月9日に開始し、弥生時代中期の竪穴住居や大型の掘立柱建物、土坑などを検出して12月19日に無事終了した。これらの成果は、土地所有者様のご理解と指導、助言を頂いた埋蔵文化財課の先輩諸氏および寒風吹き荒ぶ悪条件の中で発掘作業に従事された方々の労苦に負うところが大きい。ここに記して感謝の意を表します。なお、発掘調査は、専用住宅の建設に伴う事前調査のために国庫補助事業として実施した。

### 2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財調査課（現埋蔵文化財課）課長 常松幹雄（26・28年度）

同課調査第2係長 加藤隆也（28年度） 榎本義嗣（26年度）

調査庶務 埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）管理係 横田 忍（26・28年度）

調査担当 埋蔵文化財課（現埋蔵文化財課） 小林義彦（26・28年度）

調査・整理作業 伊藤美伸 坂梨美紀 知花繁代 田中朋香 土斐崎孝子 西田文子 濱フミコ  
日高芳子 北條こず江 増田ヒロ子 松下さゆり 森田裕子 渡部律子

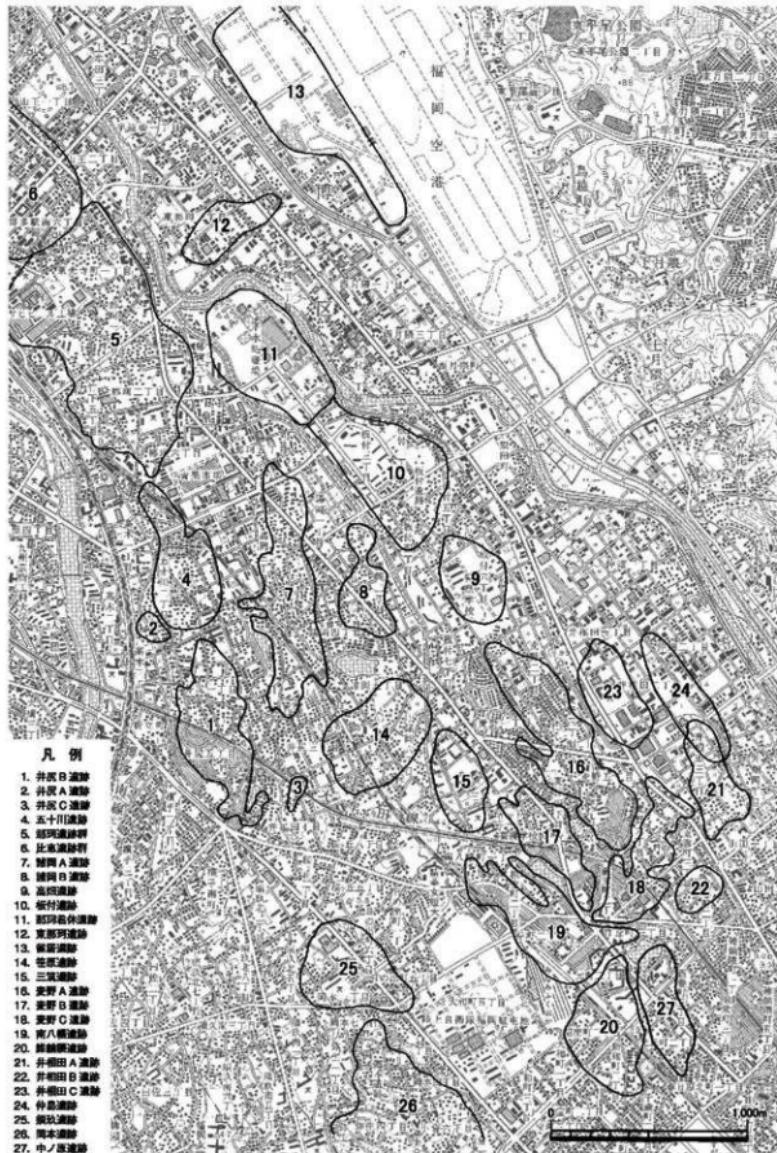


Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

### 3. 立地と歴史的環境 (Fig.1・2)

井尻B遺跡のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。

この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、標高11~18mの低丘陵が北の博多湾にむかって長く断続的に延びている。この春日丘陵と総称される洪積丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層に阿蘇山の噴火によるAso-4火砕流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する火砕流台地で、台地内には小さな開析谷が幾筋も彎入して複雑な地形をなしている。この春日丘陵は、奴國王の王墓地と推定される岡本遺跡のある須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと連なって博多湾の海岸砂丘に至る。これらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続と複合的に重なって展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

井尻B遺跡は、春日丘陵が標高を下げながら那珂・比恵丘陵へと続く標高は11~18mの低平な台地の鞍部に立地している。この井尻B遺跡については、古くには江戸時代の国学者青柳種信の著書「筑前國續風土記拾遺」の那珂郡井尻村の条に、「熊野椎現の銅矛鑄型」や「大塚」、「古瓦多く出、昔大寺など有りし」などの記述がある。また、大正13年~昭和2年には九州帝国大学の中山平次郎博士が壇棺墓や竪穴のほか瓦の包含層について報告され、寺院基礎の整地層の可能性を指摘され、早くから考古学界には知られていた。この井尻B遺跡における発掘調査は、昭和56(1981)年の第1次調査に始まり、以来43地点で調査が実施されて、丘陵上における遺構の拡がりや消長が次第に明らかになりつつある。

ここで井尻B遺跡を概観すると、その初現は後期旧石器時代に始まり、第2次調査や12次調査で細石刃やナイフ形石器、石核が出土している。その後、縄文時代は長きに亘って人跡は途絶える。

弥生時代になると、台地の北西端で弥生時代草創期の夜臼式や板付Ⅱ式の土器が散見される。中期には貯蔵穴群や壇棺墓などが拡がっているが、密度的には比較的散漫な分布を示している。後出する遺構から、この期の遺物が大量に出土することを勘案すると多くの遺構は削平されて消失した可能性も考えられる。須玖岡本遺跡を頂点とする奴国全盛の後期になると、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする集落遺構が丘陵の全域に濃密な拡がりを見せ、一大拠点集落としての様相を示す。なかでも丘陵の中央尾根線上に位置する6次調査や11次調査、17次調査では、小型彷製鏡や銅鏡、銅戈、銅矛、ガラス勾玉などの鑄型や小型彷製鏡、小銅鏡、銅鏡などの青銅製品と坩埚や青銅滴付着土器など青銅器やガラス製品の製作に不可欠な遺物が出土している。このことは井尻丘陵に青銅器やガラス製品などを生産する工房的集落があったことを示唆するものである。一方、井尻B遺跡から南東へ1kmの岡本丘陵には、奴國王墓を擁する須玖岡本遺跡があり、奴国の中心城として広く知られている。この須玖岡本遺跡には、奴國王墓や壇棺墓群を主体とする墳丘墓が点在し、その前面に拡がる裾野の沖積地には、青銅器の工房跡である水田遺跡や坂本遺跡、黒田遺跡のほかガラス製品工房跡である五反田遺跡がある。南西方にはガラス勾玉鑄型や小型彷製鏡が出土した弥永原遺跡があり、その東には後漢鏡を嗣承した臼佐遺跡が隣接している。また、井尻B遺跡から北へ続く丘陵上の那珂遺跡や比恵遺跡でも銅戈の鑄型や取瓶、中子などの鋳造用具が出土している。これらのことから須玖岡本遺跡を中心として北へ延びる井尻~五十川~那珂~比恵へと続く丘陵上には、青銅器やガラス製品を鋳造する有力な拠点的集落が丘陵ごとに展開していたものと推考される。このように青銅器やガラス製品を鋳造する奴国の有力な拠点的集落として丘陵上の各所に展開した集落群も古墳時代初めを境として稀薄になる。この期の墓域としては、土壙墓や木棺墓、石蓋土壙墓などが2次調査や27・34次調査で検出され

ている。また、これに先行する中期の壺棺墓群が、16・17・27・34 次調査など丘陵の北側で検出されている。

古墳時代になると、5世紀後半には丘陵南側の 2・5 次調査で墳径が 25m の円墳（井尻B 1号墳）が造営されている。この円墳は、前方後円墳の可能性も指摘されており、「筑前國續風土記拾遺」に記された「大塚」を想起させる。この間途絶した集落域は、6世紀後半～7世紀に掘立柱建物を中心と再び展開するが、その有り様は比較的疎らである。7世紀後半～8世紀前半には、丘陵中央部の 1・3・17 次調査で百濟系単弁瓦を初めとする丸瓦や平瓦が、11 次調査では「寺」とヘラ括きされた須恵器皿が出土しており、寺院跡（井尻磨寺）の存在が指摘されている。北の那珂、比恵遺跡でも老司式の古代瓦を伴う溝などが検出されており、寺院あるいは官衙的施設の存在が想起されている。また、東方の御笠川と諸岡川に挟まれた低丘陵上には大宰府から水城の東門から伸びた官道に沿って高畠磨寺の存在が想定されている。一方、那珂川を挟んだ左岸には銅製の箸や匙、富寿神寶などが出された三宅磨寺があり、平野内には幾つかの古代寺院が建立されていたものと推考される。

これ以降、8世紀後半から古代末、中世の遺構はきわめて稀薄になるが、開析谷を隔てた北の五十川遺跡～那珂丘陵には多く見られる。これは井尻丘陵の集落域が、農耕を生産基盤とする集落として変容し、統いて行ったものと考えられる。

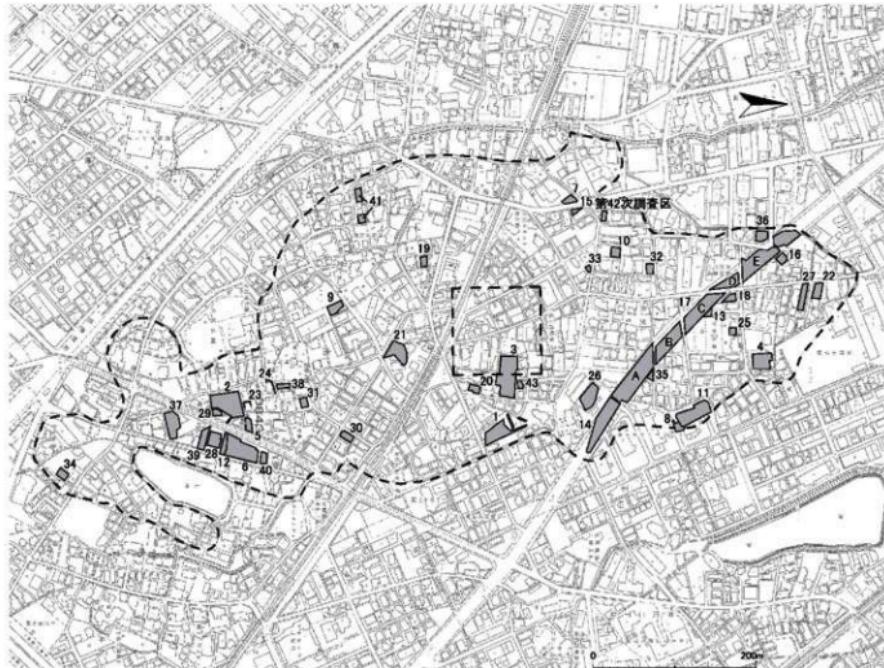


Fig. 2 井尻B遺跡位置図(1/6,000)

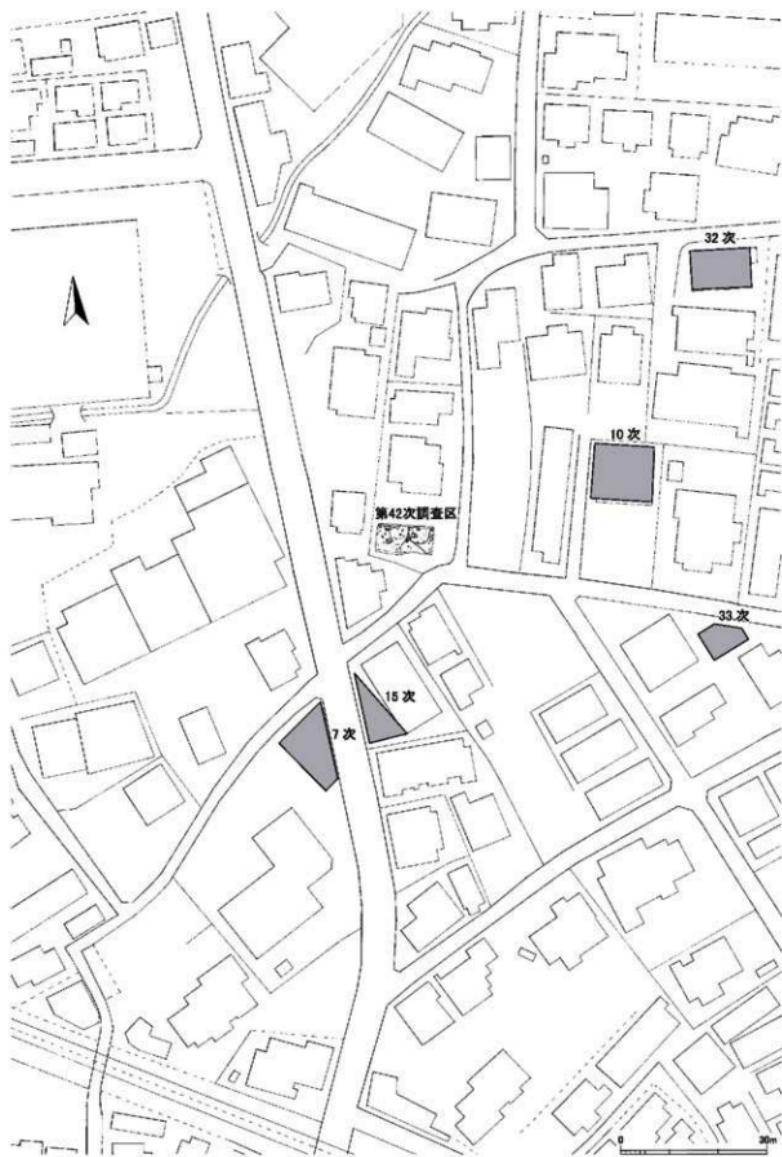


Fig.3 井尻B遺跡第42次調査区位置図(1/1,000)

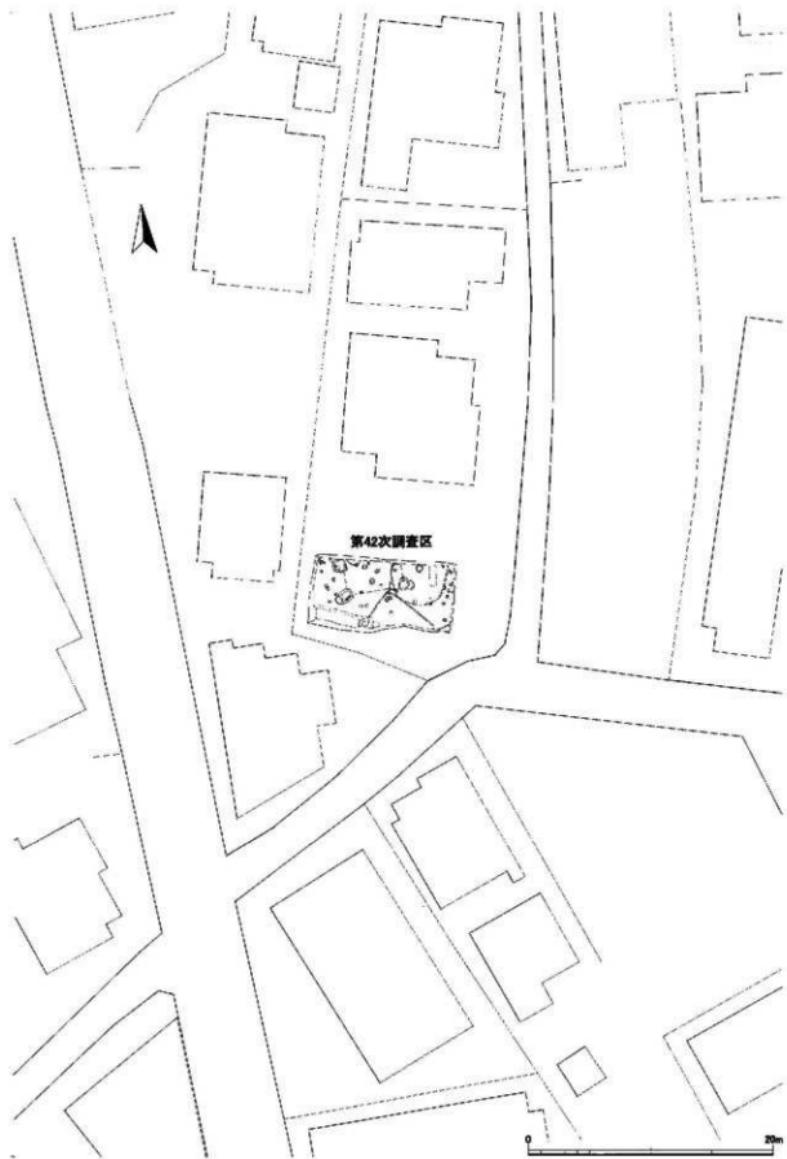


Fig.4 井戸B遺跡第42次調査区周辺現況図(1/400)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要 (Fig. 3・4・5)

井尻B遺跡は、福岡平野の西縁を北流する那珂川の右岸に沿って觀音山の小山塊から発する春日丘陵が、標高を減じながら那珂・比恵へと続いている。井尻B遺跡は、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡から1,000mほど北にあり、その北には五十川から那珂遺跡群、比恵遺跡群が低平な台地が続いている。第42次調査区は、この南北に長く延びる井尻台地の北西縁に位置し、すぐ西には、小さな開析谷が北から突入している。本調査区のすぐ東には第10次調査区が、南には第7・15次調査区が隣接しており、弥生時代から古墳時代の井戸や土坑と溝のはかに古代の掘立柱建物などが検出されており、周辺域には弥生時代から古墳時代・古代の集落域が拡がっている可能性が想定される。

試掘調査では、表土層下20cmで竪穴住居や溝が検出され、弥生時代の集落域が拡がっていると想定されていた。しかしながら、建設予定の建物に沿って面的に調査範囲を拡げると弥生時代中期の竪穴住居とそれに先行する大型の掘立柱建物および古墳時代初めの竪穴住居を検出した。南北に延びる井尻丘陵の北西縁に小さく突き出した小丘陵周辺で集落の主体となる竪穴住居の検出は初めてであり、該期の集落域が拡がっていることが明らかになった。

### 2. 竪穴住居 (SC)

#### 1号住居 SC-11 (Fig. 6・7 PL. 1・2・6)

1号住居は、調査区の東部に位置する。

西南の隔壁は12号住居に切られ、床面上からは住居によって削平された1号建物や17・18号土坑が検出された。住居の北半部は調査区外に拡がっているが、平面形は、短軸が455cm、現長が340cmの長軸は600～650cmに復原される楕円形プランをなそう。深さが29cmの壁面が急峻に立ち上がり、周溝は巡っていない。壁下には、直径が17～30cm、深さが10～22cmの円～楕円形プランの柱穴が壁面に沿って125cmと170cmの間を置いて5本が巡っている。P4とP5の間の柱穴は検出できなかつたが、125cmと170cmのスパンで存在したものと考えられる。床面は、中央部が浅く窪む凹レンズ状をなし、壁際が3cm、中央部が8cmほどの厚さに黄褐色粘土を突き固めて貼床としていた。覆土は、黒褐色～暗黒茶褐色土の單一層で、遺物は、床面上から弥生中期の甕や高環・器台片の外に土器器甕片がわずかに出土した。

1～3は、上縁部を平坦に整えた逆L字状

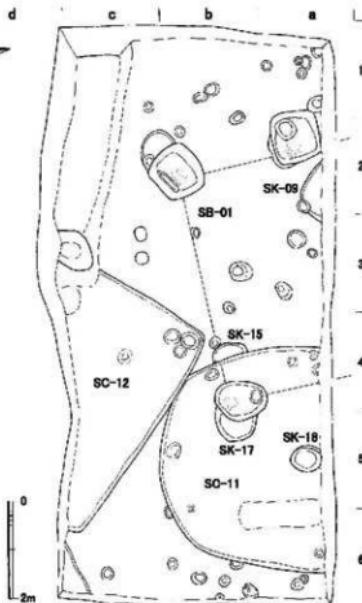


Fig. 5 第42次調査区遺構配置図(1/100)

口縁の壺で、肩部は倒卵形をなす。口径は1が29cm、2は26.6cm、3は25cmである。4は、底径が6cmの壺底部である。いずれも胎土は粗く、細～中砂粒を多く含み、色調は濃赤褐色～淡明赤橙色。1と4には2次被熱による赤変がある。5は底径が10cmの器台である。器肉は薄く、筒部はスマートに立ち上がる。胎土は粗く、多くの細～石英粗砂粒と僅少の雲母微細を含む。色調は淡明赤褐色で、2次被熱による赤変がある。

6は、砥石片である。砥面は表裏の2面で良く研ぎ込まれている。

#### 12号住居 SC-12

(Fig. 8・9 PL. 1・2・3・4・6)

12号住居は、調査区の南東部に位置し、北隔壁は11号住居の南西壁を切っている。全体に削平が著しく、南半部は調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、北壁長が490cmを測り、一辺が490～550cmほどの方形プランをなす。全体に削平が著しく、壁高は17cmと浅いが、壁下には幅が2～3cm、深さが4～5cmほどの周溝とは云い難い不揃いな溝状の掘り込みが巡っている。機能的には、壁面の崩落防止の板材を打設した可能性も考えられなくはない。北西隅には、壁面から120cmほどの距離に直径が25cm、深さが55cmの柱穴がある。このことから主柱穴は、柱間が240cmほどの4本柱と考えられる。床面はほぼフラット

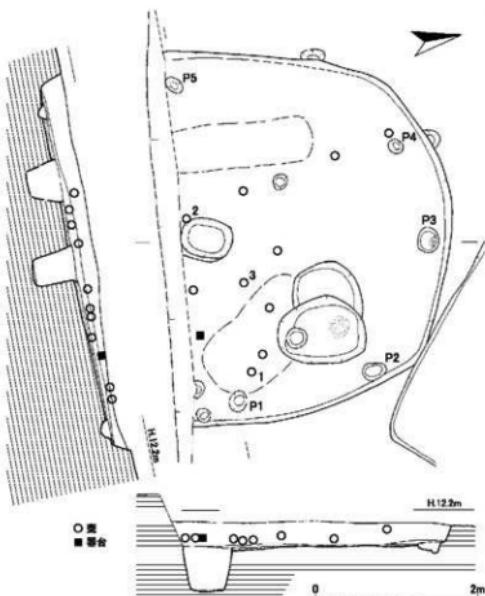


Fig. 6 11号住居実測図(1/60)

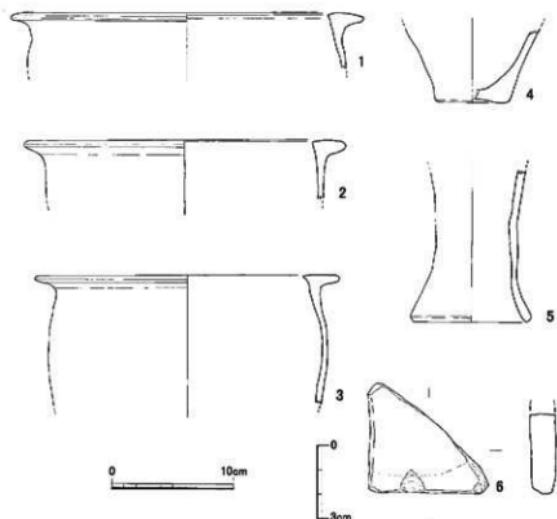


Fig. 7 11号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)

で、黄褐色粘土を5cmほど突き固めて貼床としている。また、北壁際の中央部には、焼土塊と炭片が散乱し、その周辺からは土師器小型丸底壺や甕、高坏片が比較的まとまって出土した。覆土は、暗茶褐色土の單一層である。

7・8は、小型丸底壺である。7は口径が8.5cm、器高が8.3cmで、口縁部はやや肩の張った球形の胴部から短くストレートに外反する。口縁部はヨコナデ、内面は指頭押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土は精良で、微細～細砂粒をわずかに含む。淡黄橙色。8は口径が9.6cm、器高は7.5cmである。口縁部は、偏球形の胴部からストレートに外反して延び、端部を上方に小さく擒み上げている。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部内面は、底面が指頭押圧ナデ、上半部は粘土紐の幅に沿って押圧後にヨコナデ、外面はナデ。胎土は精良で、微細～小砂粒と赤鉄鉱塊をわずかに含む。明橙色。9は、口径が15.8cm、台径が6.6cm、器高が9.4cmの台付鉢である。ストレートに立ち上がる体部はわずかに内弯する。調整は、口縁部と台部がヨコナデ、胴部内面は指頭押圧ナデ、台部内面はナデで鉢と台の接合面は強い指頭押圧ナデである。胎土は良質であるが、比較的多くの微細～小砂粒と僅少の石英粗砂粒を含む。淡明赤橙色。10は、底径が7cmの甕である。胴部内面は指頭押圧ナデ。胎土は良質であるが、多くの微細～細砂粒と少量の石英小～中砂粒を含む。色調はややくすんだ淡橙色。

11は、砂岩質の砥石である。砥面は、表裏と側面の3面にあり、良く研ぎ込まれていることから仕上砥と考えられる。12は、石庖丁片。

### 3. 掘立柱建物(SB)

#### 1号建物 SB-01

(Fig. 10・11 PL. 5・6)

1号建物は、調査区の西部に位置する東西棟の建物で、南東側の柱穴(P3)は、

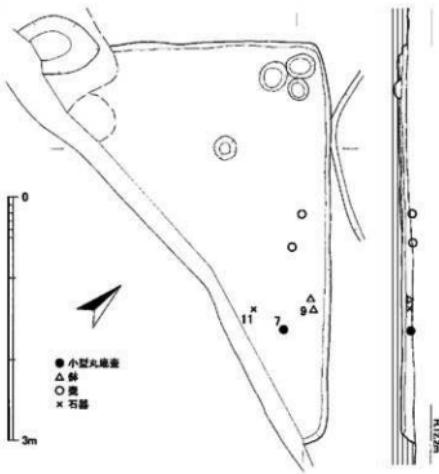


Fig. 8 12号住居実測図(1/60)

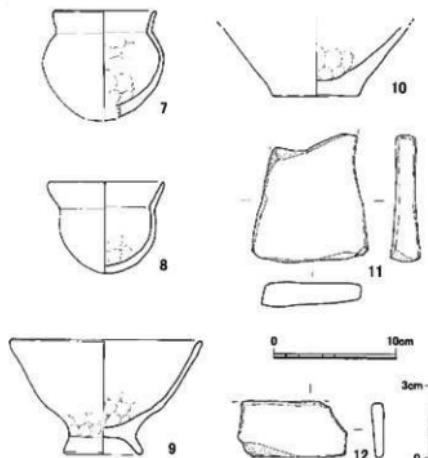


Fig. 9 12号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)

11号住居に切られている。建物は、北側の調査区外に抜がっており規模的には判然としないが、P1とP2の柱間が250cm、P2とP3の柱間が500cmを測る。現状では桁行長が500cm、梁行長が250cmの1間×1間の建物であるが、状況的には梁行長が2間の1間×2間の建物が想起されるが、桁行長も2間の2間×2間の建物の可能性もなくはない。柱穴の平面形は、P1とP2が100cm×105cmの方形プランで、深さが81~83cmの壁面は急峻に立ち上がる。P3は、長径が110cm、短径が80cmの楕円形プランを呈し、急峻に立ち上がる壁面の深さは62cmである。いずれの柱穴からも東壁に添って直径が30~35cmの柱痕が検出された。また、P1とP3の底面には、深さが10~15cmの柱痕と同径の小ピットがあり建て替えの可能性が考えられる。遺物は弥生土器や土師器片がわずかに出土した。

13は、口径が14.4cmの甕である。口縁部は大きく外反し、胴部は倒卵形をなそう。口縁部はヨコナデ、胴部内面は押圧後にナデ調整。胎土には、比較的多くの細~石英小砂粒と僅少の赤鉄鉱片を含む。内面はやくすんだ淡赤橙色、外面は赤橙色。14は、台付甕で台形は11.4cm。台部は反りぎみに大きく開き、2次被熱による赤変がある。内底面は指頭押圧ナデ、台部はヨコナデ~押圧ナデ。胎土はやや粗く、多くの細~石英小砂粒のほかに僅少の雲母微細を含む。内面はくすんだ黄橙色、外面は明赤橙色。

#### 4. 土坑 (SK)

##### 9号土坑 SK-09 (Fig. 5 PL. 6)

9号土坑は、調査区の北西部に位置し、すぐ西には1号建物のP1

がある。土坑の大半は調査区外に抜がっているために判然としないが、長辺が140cm、短辺が100~110cmほどの長方形プランに復原されようか。壁面は、削平を受けて13cmと浅く、東小口壁はやや緩やかに、南側壁は急峻に立ち上がる。坑底は、中央部がわずかに浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、暗~濃茶褐色土の單一層で、弥生甕や高杯片がわずかに出土した。

##### 15号土坑 SK-15 (Fig. 5 PL. 4)

15号土坑は、調査区の中央部に位置し、西小口壁を残して大半は11号住居に削平されている。平面形は、短辺が76cmの長方形プランを呈し、長辺は80~100cmほどに復原されようか。坑底はフラットで、深さは20cmの壁面はやや緩やかに立ち上がる。覆土は、濃茶褐色土の單一層である。

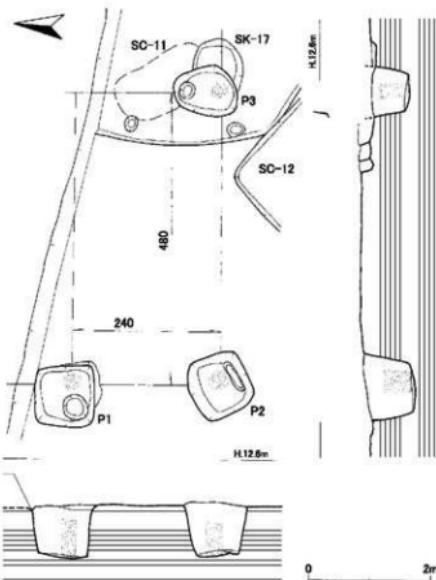


Fig.10 1号建物実測図(1/80)

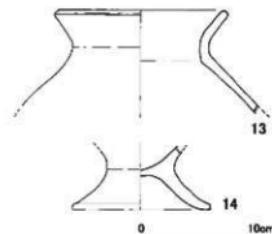


Fig.11 1号建物出土遺物  
実測図(1/4)

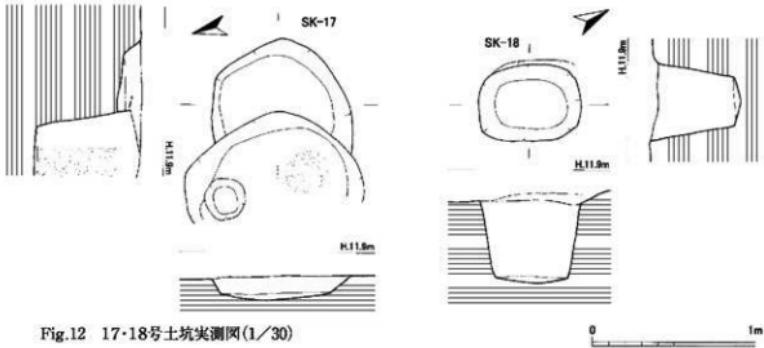


Fig.12 17-18号土坑実測図(1/30)

**17号土坑 SK-17 (Fig. 12 PL. 4)**

17号土坑は、調査区東部の11号住居内の南西部にあり、その西半は、1号建物のP3に削平されており、1号建物や11号住居よりも古い。平面形は、短辺が85cmで長辺は100~110cmの隅丸長方形プランに復原されよう。主軸方位をN-75°Wにとる。壁面の深さは15cmと浅く、北側壁は急峻にいく、また南側壁はやや緩やかに立ち上がる。坑底は、中央部が凹レンズ状に窪む舟底状の断面形をなしている。覆土は、黒褐色土の単一層である。

**18号土坑 SK-18 (Fig. 12 PL. 5)**

18号土坑は、調査区の北東部に位置し、11号住居の床面上で検出された。平面形は、長辺が63cm、短辺が51cm長方形プランを呈し、主軸方位をN-24°Eにとる。深さが60cmの壁面は、やや緩やかに立ち上がり、西側壁と北小口壁には、上縁に緩やかな屈曲面を作っている。坑底は、中央部が浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、黒~黒褐色土の単一層で、黄褐色粘土小ブロックがわずかに混入していた。

**5. その他の遺構と包含層の遺物 (Fig. 13 PL. 6)**

15は、長さが4.75cm、幅が3.4cm +  $\alpha$ 、厚さが0.75~0.83cmの扁平片刃石斧である。重さは28.9g。基部は欠損しているが、研ぎ直して再利用している。

16は、涙滴形の投弾である。長さは4.14cm、最大厚が2.22cm、重さは23.9g。胎土は精緻で、微細~細砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。色調はくすんだ黄橙色~黒色。

**III. おわりに**

南北に長く延びる井尻B遺跡の北西縁には、西方にむかって舌状の丘陵が60mほど小さく突き出している。この舌状丘陵の東には北から深い開析谷が小さく彎入している。本調査区は、この彎入する開析谷の東岸に位置し、周辺の調査例では、北東へ80mの第32次調査区で弥生中~後期の竪穴住

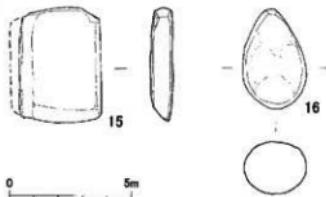
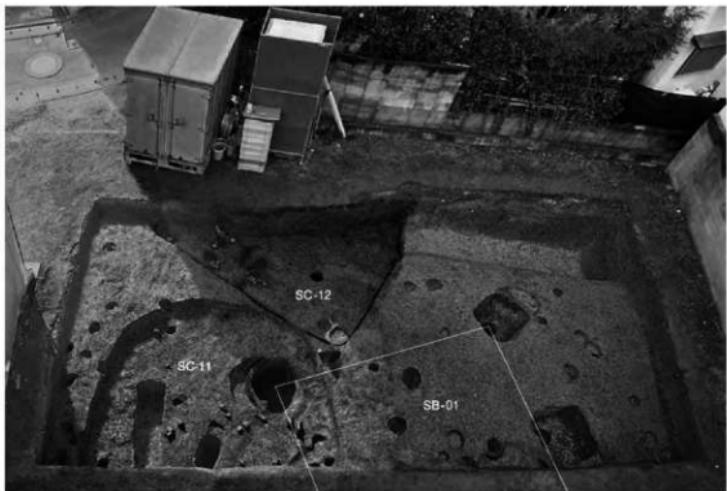


Fig.13 ピット・包含層出土遺物実測図(1/2)

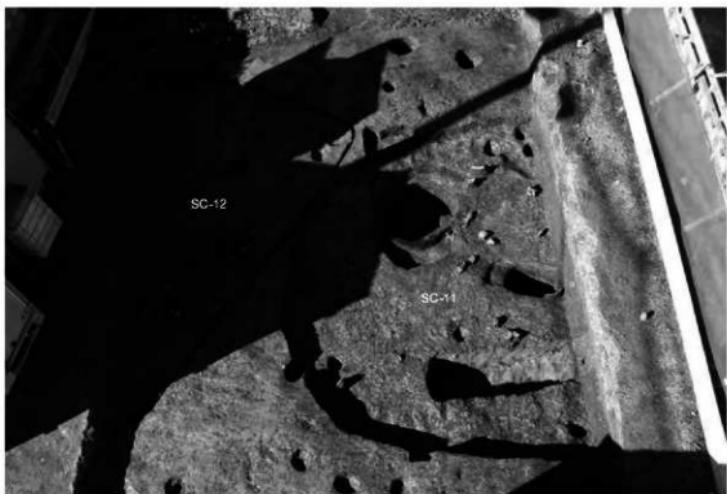
居や掘立柱建物、井戸が、10次調査区で弥生～古墳時代の溝が検出されているだけで、遺跡の北部や南部で観られる鋳型や青銅器を伴う中核的集落域やそれに伴う墳墓群の展開は要として明らかではなかった。本調査区では、弥生中期後半の堅穴住居やそれに先行する大型の掘立柱建物および古墳時代初めの堅穴住居を検出した。これは第32次調査区例と併せて井戸B遺跡の北西縁にも該期の集落域が展開していた事の証左となるものである。同時に、調査区の狭小さからその規模は明らかでないが、大型建物の検出は中期の集落域内に堅穴住居と同時あるいは多少の時間差をおいて共立していたことを示すものである。この事は、この地域にも北部域や南部域と並ぶような中核的集落域の展開が想起されるものである。今後は、周辺域の調査事例の成果を待って井戸B遺跡内における弥生時代の集落域とそれに伴う墳墓域の展開および遺跡内における丘陵北西域の相互的関連性とその消長を検討する事が必要不可欠になろう。

Tab.1 井尻B遺跡調査一覧表

真跡名	出土書	真跡期間	所在地	測量面積 (m <sup>2</sup> )	時代	遺構の観察	出土物
1 8124 111	111	1950(昭和25)年 1月17日-1月18日	井尻丁目111-1-15	600	土・埴、水路、施設施築	丸・瓦瓦	
2 8610 175	175	1950(昭和25)年 2月5日-2月7日	井尻丁目1175-1-175	930	生土・古墳	磨石方、石板、ティフ形石器、円筒埴輪、施設施築、ガラス小玉	
3 9301 411	411	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目111-2-1-2	10,060	生土・古墳・古代	生土方・土器、瓦器、土器	鐵工勺、軋車、竹の串等手斧丸
4 9335 412	412	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目147-1	390	生土施築・古墳密閉	生土密閉、土器	
5 9408 441	441	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1171-1-3	130	古墳	土器	竹筒埴輪、穿孔埴輪、ガラス小玉、鉢、瓶、刀
6 9501 529	529	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目170-171-1-1	800	古墳	生土施築・古墳密閉・作西面、獨立立造場、 柱・土器	小豆彷彿鏡、鐵輪轆轤、ガラス小玉
7 9520 年代前半10	10	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目362-1-69	6,160	古代	土器	
8 9667 571	571	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目135番地内	113	生土・古墳	生土生骨	
9 9745 678	678	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目116-33	132	生土施築	生火伝記	
10 9758 678	678	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目27-13	153	生土・古墳・古代	生土・古墳・古代	百姓丸舟打丸瓦
11 9809 644	644	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目13番地内	960	生土施築・古墳密閉	生土施築・古墳密閉・井戸、土器	蓋子頭鏡、鉢、瓶、漆器・器物
12 9865 645	645	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目170-1-15	125	生土施築・古墳密閉	生土施築・古墳密閉・生火伝記、獨立立造場、 柱・土器	鐵輪轆轤
13 9953 1216	1216	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1175-8	60	生土施築・中世	生土後圓窓穴柱付・中世・漆	漆生土器
14 9958 736	736	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目13番地内	923	生土・古墳	生土・古墳	鐵輪轆轤
15 9965 年代前半14	14	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目362-3	36	中世	唐	
16 0004 721	721	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目172-1	132	生土令塗	生土令塗	
17 0056 78-28	78-28	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目13地内	3,657	生土施築・古墳密閉	生土施築・古墳密閉・独立立造場、生火伝記、獨立立造場、 柱・土器、蓋子頭鏡	小豆彷彿鏡、小鐵輪、 ガラス小玉・蓋子頭鏡
18 0028 年代前半15	15	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目175-3	186	生土小屋・古墳密閉	生土小屋・古墳密閉・生火伝記、井戸、薪窓穴 柱・土器、蓋子頭鏡	子母・手錠、管子、ガラス小玉
19 0043 1年半12	12	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目11-32	133	古代	唐	
20 0116 年代前半16	16	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1283-1	69	生土・古墳・象形陶器	生土・古墳・象形陶器・土器	土器
21 0126 788	788	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1-2	366	生土・古代	生土・古代・井戸、施設施築、土器	
22 0133 923	923	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目175-5	141	生土・古代・中世遺構	中世・柱・繩・柱柱頭・土器、唐	
23 0474 年代前半19	19	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目163-3	22	火穴		
24 0489 年代前半19	19	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目163-1-15	66	生土・古代	生土・火穴・古代・土器、鐵	
25 0513 1251	1251	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目174-25	80	生土庵・中世	生土庵	
26 0629 973	973	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目187-1	614	中世	獨立立造場・土器、施設施築、土壤基	
27 0641 1136	1136	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目11763-395	133	生土施築	生火伝記、唐	生土・塔
28 0658 974	974	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目170-12	241	生土・古墳密閉	生土・施築・古墳密閉・土器	鐵輪轆轤
29 0668 年代前半20	20	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1-17	87	生土・古墳	生土施築・古墳密閉・延天井筒、落し口 古代・獨立立造場	
30 0734 1216	1216	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目145-17	129	生土施築・古墳密閉・古代	生火伝記、唐	
31 0765 年代前半22	22	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目160-6	103	生土施築・古墳	井尻丁目160、獨立立造場、井戸、土器	出生土器
32 0849 1251	1251	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1171172-7	98	生土・中世	生土・火穴・柱穴	出生土器、施設施築、火器、蓋子頭鏡、瓦、石器、 ガラス、鐵輪
33 0859 年代前半23	23	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目306-16	37	生土・近世	生火伝記、土器、施設施築	瓦、土器
34 0924 1106	1106	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目181-4-822	483	生土・中世	施築時代・延天井筒、落・古代・火器	出生土器・中世器
35 0938 年代前半24	24	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目174-6	61	生土・後圓窓・古代	唐	
36 1112 1217	1217	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目172-8	175	生土・古墳密築	唐	出生土器・施築帶
37 1203 1216	1216	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目174-1-174番2	607	古都・古代		イタフ形石器、丸・瓦
38 1215 1219	1219	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目160-12	59	生土	火穴	出生土器
39 1309 年代前半25	25	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目11712-172	67	生土施築	生火伝記・火器・土器	出生土器
40 1322 1252	1252	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目167-2	142	生土施築	獨立立造場・土器	出生土器・中世器、ガラス小・四・切削片
41 1404 年代前半29	29	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目133-1-16	206	中世	生土施築・延天井筒、獨立立造場、土器	鐵輪轆轤
42 1431 本番	本番	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目129-1-170番5	66	生土・古墳・古墳密築	井口	出生土器・施築帶
43 1440 年代前半29	29	1950(昭和25)年 2月11日-2月12日	井尻丁目1179-6-594番1	51	生土・中世		出生土器・中世器・施築帶



1) 調査区全景（北から）



2) 11・12号住居（東から）



1) 11号住居（北から）



2) 12号住居（北から）



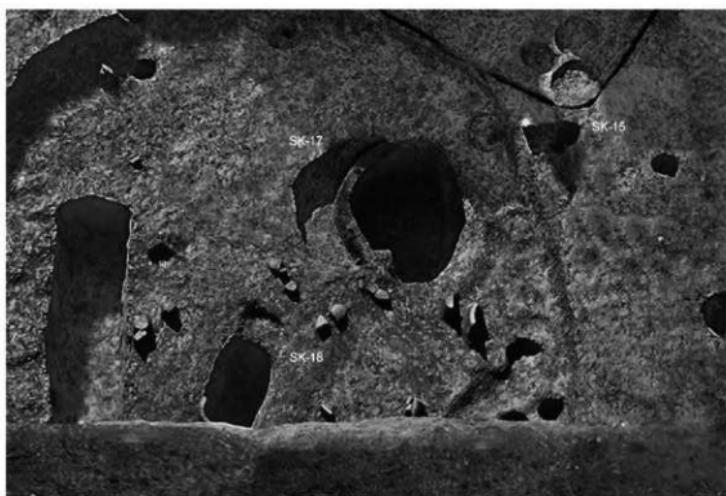
1) 12号住居遺物出土状況（南東から）



2) 12号住居台付鉢・小型丸底壺出土状況（東から）



1) 12号住居発出土状況（東から）



2) 15・17・18号土坑（北から）



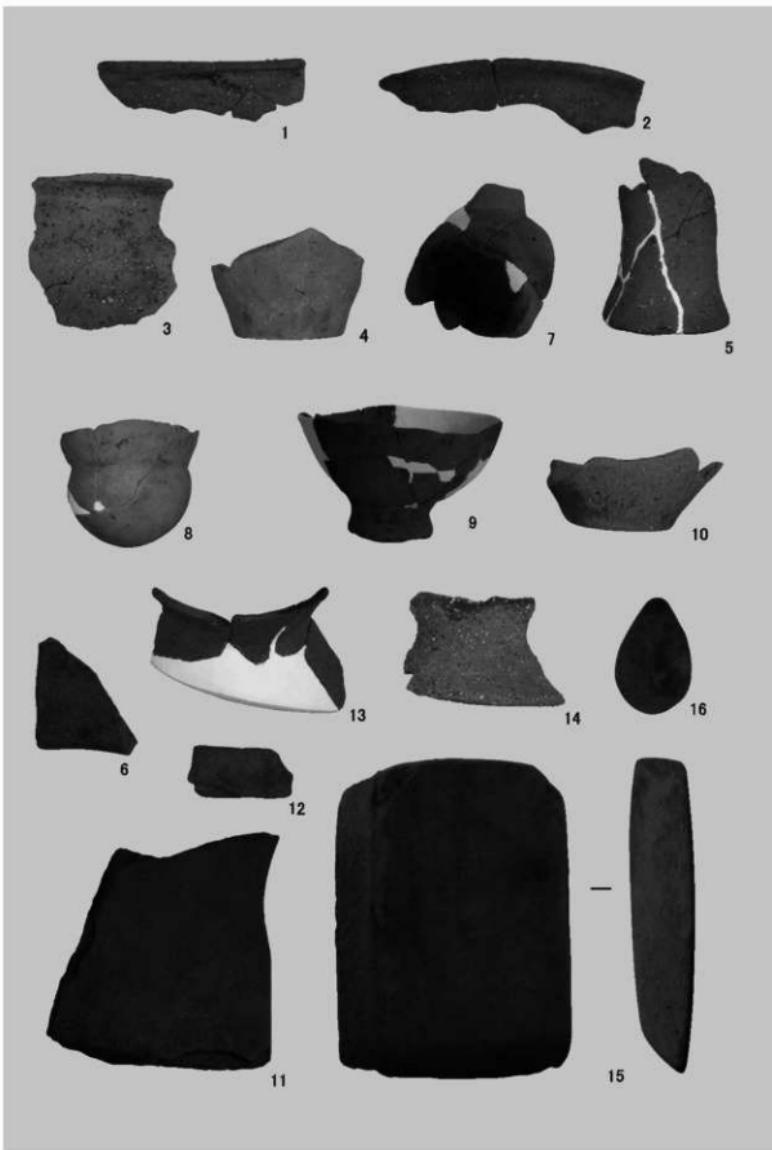
1) 1号建物（北から）



2) 1号建物 P1 土層断面（西から）



3) 1号建物 P2 土層断面（西から）



出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	いじりBいせき						
書名	井尻B遺跡27						
原書名	井尻B遺跡第42次発掘報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1307集						
編著者名	小林義彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2017年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
いじりBいせき 井尻B遺跡 がいじりちょうせき 第42次調査	あくおかみしなみく 福岡市南区	40130	90	33° 33' 17°	130° 26' 24° ~	2014.12.09 ~ 2014.12.19	66 記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
井尻B遺跡第42次調査	集落	弥生時代中期 ~ 古墳時代初め	堅穴住居、土坑、ピット	弥生上器（甕、鉢、器台、高床） 須恵器壺、滑石製幼獣車			
要約	<p>井尻B遺跡は、細旨山に発して春日市の筑紫園本遺跡から井尻、原河、比恵遺跡群へと続く低丘陵上に立地し、2kmほど東には、諫間遺跡や板付遺跡がある。第42次調査区は、この井尻B遺跡の中央部西縁に位置し、すぐ南東には井尻高寺がある。</p> <p>第42次調査では、弥生時代中期の堅穴住居1棟と縄周長が2.6m、桁行長が5.8mの大形建物1棟、古墳時代初めの堅穴住居1棟の外に柱穴を検出した。第42次調査区では、弥生時代中期後半の円形住居1棟とそれよりも古い獨立建物1棟のほかに古墳時代初めの方形作1棟を検出した。殊に、獨立柱建物の面方は、一边が100cmの方形プランを呈し、深さも50cmある大形のもので、円形住居に先行するものである。立地的には、井尻B遺跡中央部の西縁に位置し、すぐ西には、北から深い裏折谷が挿入している。本調査区西辺の第7-10・15次調査区でも同様の築造域が拡がっていることが確認されており、集落域が谷筋まで拡がっていることが明らかになった。また、規模は明らかでないが、該期の大型の獨立柱建物が検出されたことは、集落域内にあって何らかの重要な位置を占めていたことが想起される。</p>						

## 井尻B遺跡27

- 井尻B遺跡第42次調査報告 -  
福岡市埋蔵文化財調査報告第1307集

2017年（平成29年）3月27日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 有限会社 吉村綜合印刷

福岡市博多区博多駅前2-3-23-5階

